

馬獣医のよもやま話②9 前田 昌也獣医師

主観的診断と客観的診断



前田昌也

平成14年3月

大阪府立大学農学部獣医学科卒業

同4月 (有)小松温泉牧場入社

平成16年9月日高軽種馬農協入社

静内診療所勤務

現在に至る

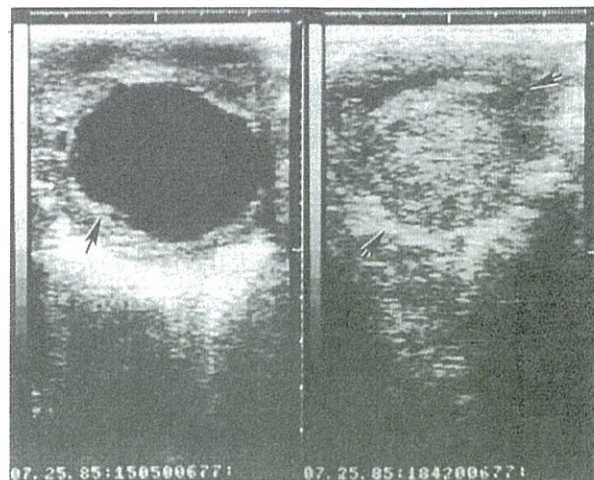
我々にとっては妊娠鑑定に依頼も随分と少なくなり、セリ前の検査に追われる季節になってきました。皆様は如何お過ごしでしょうか。今回は個別の疾患に拘らず診断の過程についてお話ししたいと思います。

【例1】種付け後に排卵確認の直腸検査を実施したところ、大きな卵胞が残っていると判断し、連続種付けを種馬場に申し込んだ。種付け時にあまりにも発情が悪いため、エコーカメラにて検査すると大きな黄体が画面で確認された。

【例2】左前肢跛行で診療依頼。触診にて下肢部の異常は確認できなかったため肩周囲の筋肉痛と考えたが、診断麻酔を実施して下肢部の感覚を消失させると跛行が改善された。X線検査により球節の剥離骨折が確認された。

これらは我々がやりかねない失敗例ですが、下に実線を引いた部分は獣医師自身のスキル・感覚に頼った「主観的診断」に相当します。この手法で全て正しく診断できればいいのですが、波線を引いた部分に相当する「客観的診断」から情報を得ることでより正確な診断を下すことができます。

皆さんに身近な例は前者でしょう。直腸検査は経験を多く積んだ獣医師ほどの確に診断出来ますが、手の感触に加えてエコーカメラで子宮の状態・卵胞の直径・貯留液や水疱の有無など多くの情報を得ることで子宮洗浄などの治療の



エコーで明らかに異なる卵胞(左)と黄体(右)

必要性なども把握できます。

つまり妊娠鑑定以外の発情診断もエコーカメラを用いれば効率が上がり、皆さんも状態が納得できて受胎向上に貢献するはずです。

繰り返しになりますが、「主観的診断」のみで万事良ければ素晴らしいことです。しかし例1のようなアクシデントが実際に起こっており、それらを防ぐためにも「客観的診断」が有用です。限られた人しか真実に辿りつけない方法より、多くの人が真実に近づける方法が普及することで皆さんの負担も軽減するでしょう。

例2のような跛行に関しても同じことが言えます。畜主の稟告が「右前肢」でも診断麻酔を実施すると左前肢に原因が判明したり、片肢の跛行とっていたが診断麻酔後に反対肢の跛行に変わり、結局両肢が痛かったという例も経験しました。

もちろん客観的診断にも最低限の手技は必要ですが、手始めに、来シーズンからエコーカメラでの発情診断を検討してみたいはいかがでしょうか？